

「古事記をよむ―いなばのしろうさぎの話」

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀
新潟青陵大学教授 原 田 留 美

◎童謡『大黒様』（「尋常小学唱歌 第二学年」上。明治三十八年「1903」に掲載）

（作詞・石原和三郎、作曲・田村虎蔵）

大きなふくろを かたにかけ

大黒さまは あわれがり

大黒さまが 来かかると

「きれいな水に 身を洗い

ここにいなばの 白うさぎ

がまのほわたに くるまれ」と

皮をむかれて あかはだか

よくよくおしえて やりました

大黒さまの いうとおり

大黒さまは たれだろう

きれいな水に 身を洗い

おおくにぬしの みこととて

がまのほわたに くるまれば

国をひらきて 世の人を

うさぎはもとの 白うさぎ

たすけなされた 神さまよ

◎古事記本文（稲羽の素戔）

故、此の大国主神の兄弟は、八十神坐しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。

避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売に婚はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、大穴牟遲神に袋を負せて、従者と為て、率て往きき。

是に、氣多之前に到りし時に、裸の菟、伏せりき。尔くして、八十神、其の菟に謂ひて云ひしく、「汝が為まくは、此の海塩を浴み、風の吹くに当りて、高き山の尾上に伏せれ」といひき。故、其の菟、八十神の教に従ひて、伏せりき。尔くして、其の塩の乾く随に、其の身の皮、悉く風に吹き析かえき。故、痛み苦しび泣き伏せれば、最も後に來し大穴牟遲神、其の菟を見て言ひしく、「何の由にか汝が泣き伏せる」といひき。菟が答へて言ひしく、「僕、淤岐島に在りて、此地に度らむと欲ひしかども、度らむ因無かりき。故、海の和迹を欺きて言ひしく、『吾と汝と、競べて、族の多さ少なさを計らむと欲ふ。故、汝は、其の族の在りの随に、悉く率て來て、此の島より氣多の前に至るまで、皆列み伏し度れ。尔くして、吾、其の上を踏み、走りつつ読み度らむ。是に、吾が族と孰れか多きを知らむ』といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏す時に、吾、其の上を踏み、読み度り來て、今地に下りむとする時に、吾が云はく、『汝は、我に欺

かえぬ」と言ひ竟るに、即ち最も端に伏せりし和迩、我を捕へて、悉く我が衣服を剥ぎき。此れに因りて泣き患へしかば、先づ行きし八十神の命以て、誨へて告らししく、『海塩を浴み、風に当りて伏せれ』とのらしき。故、教の如く為しかば、我が身、悉く傷れぬ」といひき。

是に、大穴牟遲神、其の菟に教へて告らししく、「今急やけく此の水門に往き、水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取り、敷き散して其の上に輾転ばば、汝が身、本の膚の如く必ず差えむ」とのらしき。故、教の如く為しに、其の身、本の如し。此、稲羽の素菟ぞ。今には菟神と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遲神に白ししく、「此の八十神は、必ず八上比売を得じ。袋を負へども、汝が命、獲む」とまをしき。

◎上代における「わに」の例

【古事記】

①稲羽の素兔

②（海の神は山幸彦に）塩盈珠・塩乾珠を并せて両箇授けて、即ち悉く和迩魚を召し集め、問ひて曰ひしく、「今、天津日高の御子、虚空津日高、上つ国に出幸さむと為。誰者か幾日に送り奉りて覆奏さむ」といひき。故、各己が身の尋長の随に、日を限りて白す中に、「尋和迩が白ししく、「僕は一日に送りて即ち還り来む」とまをしき。故、爾くして、其の尋和迩に告らさく、「然らば、汝、送り奉れ。若し海中を度らむ時は、惶り畏らしむること無かれ」とのらして、即ち其の和迩の頸に載せて送り出だしき。故、期りしが如く、一日の内に送り奉りき。其の和迩返らむとせし時に、佩ける紐小刀を解きて、其の頸に著けて返しき。故、其の尋和迩は、今に佐比持神と謂ふ。

（上・海幸山幸）

【日本書紀】

①又曰はく、事代主神、八尋熊鰐に化為りて、三嶋の溝織姫、或は云はく、玉櫛姫といふに通ひたまふ。而して児姫踏輔五十鈴姫命を生みたまふ。是を神日本磐余彦火火出見天皇の后とす。（神代・八の6）

②是に、火火出見尊を天鰐に乗せて、本郷に送致りまつる。（神代・十の1）

③時に豊玉姫、八尋の大熊鰐に化為りて、匍匐ひ透蛇ふ。（神代・十の1）

④已にして鰐魚を召し集へて問ひて曰はく、「天神の孫、今還去さむとす。爾等、幾日が内に、致し奉りてむ」といふ。時に諸の鰐魚、各其の長短の随に、其の日数を定む。中に「尋鰐有りて、自ら言さく、「二日の内に、則ち致しまつるべし」とまうす。故、即ち「尋鰐魚」を遣して、送り奉る。（神代・十の3）

⑤天孫、心に其の言を怪びて竊に覘ふ。則ち八尋大鰐に化為りぬ。（神代・十の3）

⑥老翁の曰さく、「復な憂へましそ。吾、計らむ」とまうす。計りて曰さく、「海神の乗る駿馬は、八尋鰐なり。是其の鰐背を豎てて、橘の小戸に在り。吾当に彼者と共に策

らむ」とまうして、乃ち火折尊を將て、共に往きて見る。是の時に、**鰐魚**策りて曰さく、「吾は八日の以後に、方に天孫を海宮に致しまつりてむ。唯我が王の駿馬は、**一尋鰐魚**なり。是当に一日の内に、必ず致し奉りてむ。故、今我帰りて、彼をして出で来しむ。彼に乗りて海に入りたまへ。海に入りたまはむ時に、海の中に自づからに可恰小汀有らむ。其の汀の随に進でまさは、必ず我が王の宮に至りまきむ。……」とまうす。言すこと訖りて即ち海に入りて去きぬ。故、天孫、**鰐魚**の所言の随に留り居して、相待つこと已に八日なり。久しくして方に**一尋鰐魚**有りて来る。因りて乗りて海に入る。毎に前の**鰐魚**の教に遵ふ。(神代・十の4)

【出雲国風土記】

- ①北の海に毘売埼あり。飛鳥淨御原の宮に御宇しめしし天皇の御世、甲戌の年七月十三日、語臣猪麻呂の女子、件の埼に道遥びて、邂逅に**和尔**に遇ひ、賊はえて舩らざりき。その時、父猪麻呂、賊はえし女子を浜の上に斂め置き、大く苦憤を發し、天に号び地に踊り、行きては吟ひ居ては嘆き、昼夜辛苦みて、斂めし所を避ることなし。……(猪麻呂は和尔への復讐を神々に祈る)……その時、須臾して、**和尔**百余、静かく**一和尔**を圍繞みて徐に率て依り来て、居る下に從りて、進まず退かず、猶ほ圍繞むのみなりき。その時、鋒を挙げて中央なる**一和尔**を刃し殺し捕ること已に訖へぬ。然して後、百余の**和尔**解散けき。殺割けば、女子の一脛屠り出でき。仍りて**和尔**をば、殺割きて串に掛け、路の垂に立てき。(意宇郡安来郷)
- ②凡て南の入海に在らゆる雑の物は、入鹿、**和尔**、鱈、須受枳、近志呂、鎮仁、白魚、海鼠、鰩、海松等の類、至りて多にして名を尽くすべからず。(島根郡)
- ③恋山郡家の正南一十三里なり。古老伝へて云ひしく、**和尔**、阿伊の村に坐す神玉日女命を恋ひて上り到りき。その時、玉日女命、石以て川を塞ぎしかば、得会はずて恋へり。故、恋山と云ふ。(仁多郡)

【肥前国風土記】

- 又、此の川上に石神あり、名を世田姫といふ。海の神**鰐魚**を謂ふ年常に流れに逆へて潜き上り、この神の所に至るに、海の底の小魚、多に相従ふ。或るは、人、その魚を畏まれば殃なく、或るは、人、捕り食はば死ぬることあり。(佐嘉郡)

【老岐島風土記逸文】

- 鯨伏の郷。郡の西のかたにあり。昔者、**船鰐魚**を追ひ、鯨走げ来て隠れ伏しけり。故、鯨伏と云ふ。**鰐魚**と鯨と並に石と化為れり。相ひ去ること一里ばかりなり。俗の鯨を云ひて伊佐とせり。(『万葉集註釈』所引)

*近現代の方言としての「わに」(『日本国語大辞典』の「わに」の項目から)

「一」魚。

(二) さめ (鮫)。《わに》兵庫県但馬 島根県
(三) あぶらざめ (油鮫)。《わん》富山県砺波 島根県八束郡・隠岐島 《わんた》島根県隠岐島

(四) えどあぶらざめ (江戸油鮫)。《わに》高知県吾川郡

(五) わにぶか (鰐鱒)。《わに》熊野

〔二〕

(一) 人が歩く時の足の向きが外に向くこと。《わに》島根県石見 (女性についていう)

(二) O字形に曲がっている足。O字脚。《わに》島根県石見 《わにや》島根県隠岐島

(三) 曲がった足。《わね》山口県

(四) 足が不自由で、普通に歩けないこと。《わね》広島県中部

* 上代における「さめ」の例

【出雲国風土記】

① 凡て北の海に捕る 雑くさぐさの物は、志毗しび、鮓ぶく、**沙魚さめ**、烏賊いか、たこ、鮑魚あはび、螺さざえ、蛤貝うむぎ 字を或は蚌菜へいさいに作る、蕨甲羸うづ 字或は石経子いしけいこに作る、甲羸かぜ、蓼螺子れうらご 字或は螺子らごに作る、螺螭子らご、石華せ 字或は螭犬脚らごいぬあしに作る。或は土曠どくわう。犬脚いぬあしは勢せなり、白貝おほふ、海藻うみづめ、海松うみまつ、紫菜むらさきのみ、凝海菜こるもは等の類たぐひ、至きはまりて繁さに、称なを尽つくすべからず。(島根郡)

② 凡て、北の海に在あらゆる 雑くさぐさの物は、鮓ぶく、**沙魚さめ**、佐波さば、烏賊いか、鮑魚あはび、螺さざえ、貽貝いがひ、蚌うむぎ、甲羸かぜ、螺子らご、石華せ、螭子らご、海藻うみづめ、海松うみまつ、紫菜むらさきのみ、凝海菜こるもはなり。(秋鹿郡)

◎ 上代における「素」の例

【古事記】

① 故かれ、**素もと**は杳冥くろけれども、本もとつ教をしへに因よりて土くにを孕はらみ島を産うみし時ときを識しれり。元始はじめは綿邈とほけれども、先まづの聖ひじりに頼よりて神を生なみ人を立たてし世を察されり。(序)

② 稻羽の素菟

【日本書紀】

① 天照大神、**素もと**より其の神の暴あく悪あしきことを知しりしめて、来詣まうくる状かたちを聞きしめすに至いたりて、乃すなはち勃然さかりに驚おどきたまひて曰のたまはく、(神代・六の〇)

② 天皇、**素もと**より饒速日命にぎはやひのみことは、是天これあめより降くだれりといふことを聞きしめせり。

(神武即位前紀戊午・一二・四)

③ 而しかるを今運屯蒙よわかぐくらまに属あひて、民おほみの心**素もと**なり。(神武即位前紀己未・三・七)

④ 「……豈兵あにいくひを挙あげて距かくべけむや」といひて、即すなはち**素施すせ**あけて自みづから服まつろひぬ。**素組すくみ**して面縛みづからとらはる。(仲哀九・一〇・三)

⑤ 乃またち且棺またひときに伏ふして薨かむさりましぬ。是こゝに、大鷦鷯尊おほささぎのみこと、**素服すふく**たてまつりて、發哀かなしびたまひ

て、哭なみしたまふこと甚はなはだ働たくぎたり。(仁徳即位前紀)

⑥ 牡鹿、答へて曰はく、『汝、出行かむときに、必ず人の為ために射られて死なむ。即ち白塩しほを以もて其の身に塗ぬられむこと、霜しもの素すきが如ごとくならむ応おこなり』といふ。(仁徳三八・七)

⑦ 是の時に当りて、倭直吾子籠、素すより仲皇子に好おほし。(履中即位前紀)

⑧ 天皇崩りましぬ。…難波津に泊りて、則ち皆、素す服ふくきる。(允恭四二・一・一四)

⑨ 爰に大兄王答へて曰はく、「摩理勢は素すより聖皇の好おほしたまふ所なり。…」とのたまふ。(舒明即位前紀)

⑩ 然も、素すより天皇の聖化に頼みて、旧俗に習へる民、未だ詔らざる間に、必ず当に待難かるべし。(大化三・四・二六)

⑪ 又、王者の清素なるときは、山に白雉出づ。(白雉元・二・九) (潔白で飾り気のないこと)

⑫ 明年に、皇祖母尊、即天皇位す。七年の七月の丁巳に、崩りましぬ。皇太子、素す服ふくたてまつりて称制す。(天智即位前紀)

⑬ 凡て緇せと素すと扱あはずして、癸亥の年より起りて、三歳に至るまでに、並に官の食を賜へり。(天智五・是冬) (緇は墨染めの衣で僧侶、素は白色の衣で俗人)

⑭ 是に、蘇賀臣安麻侶を遣して、東宮を召して、大殿に引き入る。時に安摩侶は、素すより東宮の好おほしたまふ所なり。(天武即位前紀)

【万葉集】

○…紅顔は三従と長とこに逝いき、素す質しつは四徳と永とこに滅ほぶ。何そ、偕老の要期えうごに違たがひ、独飛とくひして半路はんろに生かむといふことを図らむ。(五・七九四序) (婦人の色白い肌)

【懐風藻】

①…素す梅ばい素す靨えを開き、嬌けう鶯あう嬌けう声を弄もぶ。…(葛野王「春日、鶯梅を翫す」) (白梅)

②…階かひ梅ばい素す蝶てつに闘かひ、塘柳たうりう芳塵ほうじんを掃はふ。…(紀麻呂「春日、応詔」) (白い蝶)

③…諸性流水を汲み、素す心しん静仁じやうにに開く。(藤原史「吉野に遊ぶ」) (潔白な心)

④…素す庭てい英才えいさい満ち、紫閣しかく雅人がじんを引く。…(石川石足「春苑、応詔」) (質素な清らかな庭)

⑤…将に造化の趣おもを歌はむとして、素すを握りて不工ふこうを愧はづ。(大伴王「駕に吉野宮に従ふ、応詔」) (素毫。筆のこと)

⑥…茲の時こゝ尽と清素せいそ、何ぞ用もちるむ子雲しうんが玄げん。(刀利宣令「五八の年を賀く」) (潔白で飾り気のない人々)

⑦…千尋せんじんの素す溝みぞ逆折さかして流る。…(紀男人「吉野川に遊ぶ」) (白波)

⑧ 緇せと素すとは杳然えうぜんにして別れ、…(釈道慈「初春竹溪山寺に在り、長王が宅にして宴するに、追ひて辞を致す」) (緇は墨染めの衣で僧侶、素は白色の衣で俗人)

- ◎ 「いなばのしろうさぎ」 神話 三つの謎
- ・「和迹」とは、どのようないきものか。
 - ・「蒲黄」とは、何か。
 - ・「素菟」は、白い被毛のウサギなのか。

I 「和迹」とは、どのようないきものか。

A 爬虫類説

イ 「いなばのしろうさぎ」と似た話が、インドネシアに伝わっている。洪水のため川を渡れなくなった鹿が鱧を欺いて背を踏んで川を渡り、鱧を馬鹿にする話。

ロ 神代紀に「時に豊玉姫、八尋の大熊鱧に化為りて、匍匐ひ透蛇ふ。」とある。身をくねらせる姿は、ワニが這い回る姿の説明としてふさわしい。

ハ 『出雲国風土記』に、海産物として「和迹」「沙魚」の両方が見える。

ニ 『和名類聚抄』に「鱧」の説明が載っている。

「似鱧、有四足、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鱧擊之皆中斷」（スツポ

ン？に似て四足有り。口先の長さは三尺で歯は非常に鋭い。虎や大鹿が水を渡ると攻撃し、中斷する。）

ホ 「鱧口」という仏具があるが、その形状は鱧の口のようである。

へ 古代人は、想像上の動物である竜を知っていたのだから鱧も知っていただろう。

B 魚類説

ト 七〜八世紀の日本には爬虫類のワニは生息していなかった。

チ 近現代の例だが、山陰地方ではサメをワニと呼ぶ地域がある。広島北部のワニ料理も郷土料理として有名。

リ 神代紀に「海神の乗る駿馬は、八尋鱧なり。是其の鱗背を豎てて、橘の小戸に在り。」とある。背びれがある「ワニ」は爬虫類ではない。

II 「蒲黄」とは、何か。

『和名類聚抄』に、「蒲黄 和名加末乃波奈 蒲花上黄者也」（蒲黄 和名は、かまのはな 蒲の花の上の黄色いもののこと）

蒲の花粉は生薬で、傷薬として使われている。蒲の穂（雌花）や穂綿には薬効成分はない。

III 「素菟」は、白い被毛のウサギなのか。

C 白い被毛のウサギ説

又 「素」は、白色の意味に使われている。仁徳紀に「霜の素きが如くならむ応なり」とある。『万葉集』に「素質」、「懐風藻」にも「素梅」とある。

ル 最後の方に、「今には菟神と謂ふ。」とある。神聖性を帯びた動物には、白色のものが多い。

D ウサギの被毛を衣服にたとえたため「素」の字が用いられた説
 ヲ 「即ち最も端に伏せりし和迹、我を捕へて、悉く我が衣服を剥ぎき。」とあり、被毛を衣服にたとえている。**素旆****素服****素**等の用例が『日本書紀』に見え、「素」は繊維のものによく使われる。

E 裸のウサギ説

ワ 「素」には、なにもまとわなない、といった意味がある。

カ 「素」には、「かざらない」という意味がある。『懐風藻』に**素庭**、『日本書紀』に**朴素****素服**と見える。「素服」は、喪服の時に使われる言葉であることから、単に白色というより、「飾りや染めがほどこされていらない」と解するべきである。生の麻布は白っぽい。

ヨ 蒲の花粉がとれる時季、ノウサギの被毛は白くない。

※『日本書紀』の白ハタと素ハタ

・天皇の使者の至ることを聆きて、則ち磯津山の賢木を抜りて、上枝には八握の剣を掛け、(中略)亦**素幡**を船の舳に樹てて、参向て啓して曰さく、「願はくは兵をな下しそ。我が属類、必に違きたてまつる者有らじ。……」(景行十二年九月五日)
 ・「……豈兵を挙げて距くべけむや」といひて、即ち**素旆**あげて自ら服ひぬ。**素組**して面縛る。(仲哀九年十月三日)
 ・河辺臣瓊缶、独り進みて転闘ふ。向ふ所皆抜りつ。新羅、更**白旗**を挙げて、兵を投て降首ふ。河辺臣瓊缶、元より兵を暁らずして、対ひて**白旗**を挙げて、空爾に独り進む。(欽明二十三年七月)

絵本(文/絵)	ワニの絵	ガマの絵	ウサギの被毛
『おおくにぬしと80にんのきょうだい』国土社 前川康男/田名網敬一 一九六八年	わに 爬虫類	がまのほ*1 絵なし	黄色く白 目が赤い
『おおくにぬしのぼうけん』岩崎書店 福永武彦/片岡球子 一九六八年	わに 冒頭は爬虫類 後に魚類的	かふん*2 雄花+雌花	白 目・赤2頁 黒3頁
『いなばのしろうさぎ』国土社 坪田譲治/福田庄助 一九六九年	わに 爬虫類	かふん*3 穂の形不明	白
『いなばのしろうさぎ』すばる書房 前川康男/太田大八 一九七九年	わにざめ 魚類	がまのほ*4 雄花+雌花	頁により白・ 灰色(二色刷)
『いなばのしろうさぎ』トモ企画 舟崎克彦/赤羽末吉 一九八四年	さめ 魚類	蒲の花粉*5 雌花	茶色
『いなばの白ウサギ』佼成出版社 谷真介/赤坂三好 二〇〇六年	サメ 魚類	かふん*6	白
『いなばのしろうさぎ』金の星社 いもとようこ 二〇一〇年	さめ 魚類	がまのほわた*7 雄花+雌花	白